

「自己の生き方について、自分と向き合い考えを深める」授業

「好き嫌いにとらわれず、誰にも同じ態度で接することは大切なことだな」（価値理解）、「仲間外れはいけなく分かっているけど、周りに流されてしまうことがあるよな」（人間理解）、「発言力の強い友達に対して、きちんと意見を言うように心掛けている子もいるんだな」（他者理解）、「そう言えば、あの時ばかりは友達を大切にすることができていたのだろうか」（自己理解）と、道徳的価値の理解を深め、自己を見つめるつづきやきが聞こえてくる道徳の授業。

今、「道徳」で求められているのは、自分の生活経験に基づく考えのみに留まらず、多様な考えを持つ友達と議論しながら道徳的価値を理解するとともに、一人一人が自分と向き合い、道徳的価値の自覚を深めていく「考える道徳」「議論する道徳」です。

人格の基盤を形成する小学校段階においては、1時間1時間の「道徳」の授業を確実に積み上げることを通して、子どもが将来出会うであろう様々な場面や状況において、適切な行為を主体的に選択し、実践することができるような内面的資質（道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度）を育てることが大切です。

ポイント 1

温かい人間関係を基盤とした話し合いを大切にする

話し合いにおいては、生活経験の出し合いのみにならないように留意するとともに、仲間との話し合いが自分の体験やそれに伴う考え方や感じ方について深く考える機会となるようにしましょう。教師は、「〇〇さんのように思ったことある？」「今までにそういう場面があったかな？」と、必要に応じて問い返したり、「でも、言えないときもあるんじゃない？」と切り返したりすることが必要です。

そのためには、子ども一人一人が自分の感じ方や考え方を伸び伸びと表現することができる学級の雰囲気がとても大切です。子ども相互の温かな人間関係、子どもと教師の信頼関係の構築に努め、多様な意見を認め合い、発言を最後まで聞いてもらえる安心感のある学級集団をつくりましょう。そのような学級集団であれば、自然に子どもの本音が出て、話し合いが深まることでしょう。

ポイント 2

「自己を見つめる」場面を充実させる

一人一人が、自分とじっくり向き合い、考えを深めるためには、自己を見つめる時間を十分に確保することが重要です。そのために、導入、展開、終末の時間をバランスよく配分するとともに、発問を精選し、子どもが自分と向き合う時間をしっかりと確保しましょう。

なお、登場人物の気持ちに共感したり、自分との関わりの中で思いを想像したりすることを十分に行うことが、道徳的価値を自分に引き寄せて考えることにつながります。そのため、仲間との話し合いの広がりや深さ、さらには、自分の体験やそれに伴う考え方や感じ方について想起できているかが、「自己を見つめる」場面のポイントとなります。

実践事例(小学校4年生)

主 題 名 みんな仲間 内容項目【公正、公平、社会正義】
 教 材 名 「同じ仲間だから」（出典：『私たちの道徳』文部科学省）
 本時のねらい ひろしに対してきびしくはつきりと言ったとも子の思いについて考え、役割演技によって体験的に感じ取らせることを通して、誰に対しても公正・公平に接するという道徳的な態度を育てる。

主題設定の理由 ※道徳的価値、子どもの実態、教材に即して設定理由を記述する。

学習過程

段階	学 習 活 動	
導入	<ul style="list-style-type: none"> ○ドッジボール大会の写真を提示 ・最初は勝っていたけど、途中から赤組がどんどん当てられて負けちゃったんだよね。 ・青組はA君がいるから強いんだよ。勝っていいな。 ・ぼくのチーム、いつも負けてばかりだよ。 	<p>チーム分けをしてドッジボールをしたときの体験を想起させ、教材への方向付けを図ります。</p>
展開 前段	<ul style="list-style-type: none"> ○場面絵を用いて教材を提示する。 ○「そうかい。でも休んだ方がいいんじゃないか。ともちゃん、どう思う？」と言われた時、とも子は心の中で何とつぶやいていただろう。 ・光夫さんが大丈夫だと言ってるのに、無理矢理休ませるのは悪い。 ・ひろしさん、そんなこと私に聞かないでよ。 ・でも、光夫さんがいなければ本当に勝てるかも知れないわ。 	<p>教材の提示の仕方を工夫します。学級の子も全員が場面を思い描くことができるようにし、話し合いに参加できる土台を作ります。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ◎転校したよし子からの手紙を思い出し、はっとしたとも子は、どのようなことを考えていただろう。（ワークシート） ・よし子もつらい思いをしている。言葉が少し違うだけで仲間外れにするなんてひどい。かわいそう。 ・よし子を何とかしてあげたい。周りの人は助けてくれないの？ ・でも、もしかしたら、私も光夫さんに同じことをしているのかも知れない。光夫さん、ごめんなさい。 	<p>「公正・公平」の価値を自覚するきっかけになった場面を取り上げ、登場人物に自分を投影してその判断や心情を考えさせます。</p>
展開 後段	<ul style="list-style-type: none"> ○あなたもとも子さんになって、ひろしに向かってきびしくはつきりと言ってみよう。＜役割演技＞（ペア→全体） ・光夫さんを外して勝とうとするなんて、まちがっていると思うの。だって、みんなですることに意味があるでしょう。 ・つらい思いをする子を作ってはいけないわ。よし子も今苦しんでいるのよ。自分がそうになったらどんな気持ちだと思う？ ・みんなこのクラスの仲間でしょう。人によって態度を変えるのは恥ずかしいことだわ。私もこれから気を付ける。 ・正しいこと、まちがっていること、ちゃんと言わなきゃだめ。 ○自分が実生活でとも子のような行動ができたことはありますか。またできなかったことはありますか。（ワークシート） ・放課後友達と遊ぶ時、みんなに声をかけて遊んでいるよ。大勢で遊ぶと楽しいよ。 ・仲間に入れてあげなかったことがある。心がもやもやしたよ。 ・あの時は友達に言えなかったけど、言うことって大事だよな。 	<p>役割演技（追体験）をすることによって、自分事として考えることができます。誰に対しても公正・公平な態度で接することの大切さについて価値理解をした子どもが、実際に言葉にして言う行為を体験します。そして、どんな気持ちかを感じたかを教師が問い返すことが大切です。</p>
終末	<ul style="list-style-type: none"> ○教師の説話 ・「みんな仲間」という友達の詩を紹介します。 	<p>終末は温かく、余韻を持たせません。教師の説話、詩や手紙、映像等、授業の流れに沿って工夫します。</p>

「人間としての生き方について、広い視野から多面的・多角的に考えを深める」授業

「みんなで守るからこそ規則の意味がある」(価値理解)、「規則を尊重すべきだと分かっているけど、時に優先順位が変わってしまうことだってあるよな」(人間理解)、「職業人として、規則に対する認識が甘いと批判する考えも分かる」(他者理解)、「今まで自分は規則の意味が分かっていたらどうか」(自己理解)と、道徳的価値の理解を深め、自己を見つめるつづきやきが聞こえてくる道徳の授業。

中学校では、小学校で積み上げた自己の生き方についての考えの深まりを基盤に、道徳的価値を理解し、物事を広い視野から捉え、多面的・多角的に、人間としての生き方について考えを深めることが求められます。そして、自立した人間として、他者とともによりよい社会の実現を目指そうとする姿勢を育むことが重要です。

そのため、中学校の道徳の授業では、発達の段階を踏まえ、多様な指導方法を工夫し、「考える道徳」「議論する道徳」を進めましょう。

■ ポイント 1

何を考え、議論させたいのか、ねらいを明確にする

子どもに何を考えさせ、何を議論させたいのか、本時でねらいとする道徳的価値を教師が明確に押さえることが大切です。その上で、子どもの実態に応じ、教材のよさを生かしながら、多様な考えを引き出す発問を工夫することが、考え、議論する道徳の授業につながっていきます。

■ ポイント 2

多様な指導方法を工夫し、多面的・多角的に考えさせる

道徳的価値は様々な価値と密接に関連して成り立っています。物事を多面的・多角的に考えさせ、ねらいとする価値に迫るために、発問、指導形態、指導方法等を工夫することが大切です。

○ 発問を吟味する

子ども一人一人がどのような考えを持つのか、事前に書き出してみることで、物事を広い視野から多面的・多角的に考える発問であるかどうかを吟味します。

特に、中心発問は、登場人物の心情を問うのか、生き方や道徳的価値そのものの意味を問うのか、子どもの考えがより深まるように吟味しましょう。

○ 考え合う場を工夫する

自分の考えを仲間へ伝え合うことで、多様な考え方や感じ方に気付いたり、自分の考えが深まったりします。中には、自分の思いや感情を表出することに消極的な子どもの姿も見られることから、ペアや少人数のグループ等、実態に合わせた工夫が必要となります。

○ 効果的に問い返しや補助発問をし、子どもの考えを引き出す

仲間との話し合いが、自分の体験やそれに伴う考え方や感じ方について深く考える機会となるよう、教師は「それってどういうこと?」「そこをもう少し具体的に考えると?」「でもね、だって…の続きを聞かせて」とのように、必要に応じて問い返しや、補助発問をしたりしましょう。話し合いで意見を交流し、練り合わせることで、子どもの道徳的価値の理解は深まり、個々の子どもの考えも深まります。

■ 実践事例(中学校2年生)

主 題 名 きまりの意義 内容項目【遵法の精神、公德心】
 教 材 名 「二通の手紙」 出典：『私たちの道徳』(文部科学省)
 本時のねらい 法やきまりの意義に気付き、それを守ることの大切さについて自分の考え方を深めることにより、秩序と規律のある社会を実現しようとする態度を育てる。
 主題設定の理由 ※子どもの実態と中心価値、教材に即して設定理由を記述する。
 学習過程

段階	学 習 活 動	子どもの実態に依り、価値への方向付けをし、問題意識が持てるようにします。
導入	○ みんなの周りには、どんなきまりがありますか。 ・廊下を走らない。 ・2分前着席をして始業を待つ。 ・自転車で二人乗りをしない。危ないから並進はしない。	
展開前段	○ 教材を提示する。 ○ 「二人を特別に中に入れてあげよう」と言った元さんは、何を思っていたのだろうか。 ・何か事情があるのだろう。姉と弟の願いを叶えてあげたい。 ・入園終了時刻は過ぎたけれど、閉門時刻までに帰ってくればいだろう。 ◎元さんにとって、どちらの手紙が心に届いたのだろうか。	規則とは分かっているけども守れないときもあるといった人間の弱さに気付かせ、人間理解を促す発問です。
展開中段	○ 自分の考えをワークシートに書く。(個) ○ 議論する。(グループ→全体) <母親からの手紙> ・母親と子どもがこんなにも喜んでくれていることが分かって嬉しかった。救われた思いがしたから。 ・どんな事情があったのか分かり、納得したから。 ・やっぱり規則で割り切れないことがあるのだと思えたから。 <懲戒処分の手紙> ・自分はいい人になったつもりでいたと反省したから。 ・もし子どもたちに何かあったら、取り返しのつかないことになっていた。自分の甘さに気付かされたから。 ・規則の重さを実感し、処分は当然だと納得したから。 <どちらとも言えない、両方とも心に届いた> ・どちらも響いているんだよね。報われもしたし、深く反省した。 ・いいことをしたし、いけないこともしたから、どちらとも言えない。決めることはできない。悩んでしまう。 ・ぼくも元さんと同じ行動をしたと思う。でも難しい問題だな。	子どもの考えを広げたり深めたりする問い返しや補助発問が重要です。(例)「元さんは、どちらの手紙がありがたいと思ったのか」「でも、元さんは自ら職を辞し、去っていったんだよね」
展開後段	○ あなたにとって、きまりとはどんなものですか。 ・きまりは窮屈なものだと思っていたが、きまりによって安全が守られているということが分かった。 ・社会の一員として共に生きていくためには、法やきまりはみんなを守ってこそ意味がある。 ・同情する気持ちはぼくの中にもある。でも、「元さんはいい人」という結論では間違っている。規則を守るとは社会の一員としてもっと重いことだと思った。 ・「自分一人くらいいいだろう」の考えが横行すると、社会の秩序が保たれなくなる。2分前着席にも意味があると思った。 ・規則は大切だと分かっているけど、本当に守れるか不安だな。 ○教師の説話(自分が学生だったときの昼休みの出来事について)	他者と議論することを通して、道徳的価値を多面的・多角的に考えさせます。子どもの実態把握(発達の段階)に基づく「教師の指導観」が明確であれば、二者択一の発問やテーマ性のある発問も有効です。
終末		教師が自身の持つ弱さを経験談として自己開示することは、人として道徳の問題を一緒に考え続ける姿勢につながります。子どもと共に、語り合い、寄り添う姿勢が大切です。